

小林正弥 監修・藤丸智雄 編
『本願寺白熱教室——お坊さんは社会で何をするのか?』

熊本英人

本書は、二〇一一年九月一三日、本願寺聞法会館において開催された「本願寺白熱教室」での対話を軸に、仏教における（あるいは、浄土真宗における、あるいは、浄土真宗本願寺派における）「公共性」を論じたものである。

「」存じのよう、「白熱教室」とは、NHKが二〇一〇年四月から放映した『ハーバード白熱教室』からきたタイトルで、それは communitarianism（共同体主義）の立場からの政治哲学講義ともいべきものであった。原題は Harvard University's Justice with Michael Sandel で、アメリカのWGBHとハーバード大学の製作。その後、NHKでは、サンデル氏を招いて独自の講義（番組）を作成し、また、他の講師による聴講者参加型の講義に「白熱教室」を冠した番組を作成している。

本願寺白熱教室は、このNHK版『ハーバード白熱教室』で解説を担当し、サンデル氏の知己でもある千葉大学の小林正弥氏をファシリテーターに迎えて行われた。本家「白熱教室」のスタイルに倣い、十一のジレンマを設定して、「公共性」を主題に、仏教の現代的な課題について対話を行ったのである。

そして、この十一のジレンマを受けて、八つの章を設けて、ジレンマに応答する論が展開されている（ただし、第八の小林正弥氏の論は、「本願寺白熱教室」に先立つて行われた講演）。

本書の構成は以下の通り。目次には、それぞれの章の狙いも付してあるので、内容理解のために「」で記した（傍線は原書ママ）。

はじめに——「公共性」と宗教について（藤丸智雄）

○ 本願寺白熱教室——11のジレンマ（小林正弥・八橋大輔監修）「公共性」という、一人ひとりのかけがえのない存在に応答していくこうとする原理から、対話の場を開き宗教について考えてみました。」

一 開かれた浄土真宗——教えを床の間に飾つておいてよいのか？（徳永一道）「人々に伝わる言葉で価値を伝えることができるているのだろうか」

二 生と死の公共性——宗教は津波から命を救えるのか？（藤丸智雄・川元恵史）「わかり合えない他者の声を聞くことができるているのだろうか」

三 原発の是非の倫理的問い合わせ宗教界の声——仏教は原発に反対声明を出すべきか？（島薗進）「社会に向けて、他者の声を届けることができているのだろうか」

四 宗教は他者を排除するのか？——公共性と他者・公共性にとって他者はどのように大事な問題なのか？（川村覚文）「宗教こそが他者を排除しているのではないだろうか」

五 「葛藤する存在」が作り出す公共性——欲望から公共圏の可能性を考えよう（丘山新）「他者と共に活動できる公共性は宗教的に可能なのか」

六 ウェブに見る宗教の公共性——浄土真宗はウェブに存在しているのか？（雲居玄道・藤丸智雄）「情報社会の中

で発信できているのだろうか」

七 「お寺」と地域の公共性——なぜ、寺は潰れないのか？（菊川一道）「お寺とは、他者とつながる場なのだろうか」

八 基礎から学ぶ「公共性と宗教」（小林正弥）「公共性」の基礎を学びつつ、これらの課題について考えてみました。あとがき——公共性をめぐる仏教的対話空間（小林正弥）

コラム 袢裟の威力・インド宗教の「びっくり」公共性・前五〇〇年の奇跡・学生の仏教珍回答！・ネット社会の僧侶たち・手作りのお寺

これに、「白熱教室」の十一のジレンマを加えると、本書の持つ問題意識がよく理解できる。

「白熱教室」では、「遠く離れたとある地域で災害が起こり、そこへボランティア活動に行く僧侶」という仮の設定のもとで、「自然災害と宗教」に関わる十一のジレンマについて、お寺や僧侶の問題、社会の未来についての対話を行っている。

- 1 お寺を離れて、救援活動に行くべきか？
- 2 宗教活動でなく、ボランティア活動をするか？
- 3 袢裟を着てボランティアをするか？
- 4 宗派の形式でない葬儀をするか？
- 5 宗派色を出さずに、精神的な問題に対応するか？
- 6 信仰をもつていれば、被災しないのか？
- 7 宗派色のないお寺を建てるか

- 9 社会活動をやめるよう圧力がかけられたら従いますか？
- 10 原発再稼働に反対声明を出しますか？
- 11 宗派からの撤退の要請に従いますか？

監修の八橋大輔氏によつて整理されているように（七四一～七五頁）、第一章はジレンマ5に、第二章はジレンマ5・6に、第三章はジレンマ9・10に、第四章はジレンマ7・8に、第五章はジレンマ1・2・3に、第六章はジレンマ11に、第七章はジレンマ7・8に、第八章はすべてのジレンマの基礎に位置づけられている。

このように概観するだけでも、本書が明らかにしたい世界がはつきりと見えてくる。それはまた、本書において提示された問題は、仮定に基づいた議論ではあるが、現在進行形の問題でもあるということである。

ジレンマに呼応する第一章から第七章までの問題設定は、編者の藤丸智雄氏によるものであり、その分野は広範囲に涉っている。各章の概要是小林正弥氏のあとがきにも整理されているのでそちらに譲る（二四一～二四五頁）。

ここでは、本書の基本的問題について指摘しておきたい。

本書の副題に「お坊さんは社会でなにをするのか？」とあり、また、本書の帯の惹句にも、「お坊さんだつて、迷つてゐる。その悩みを共有することで、お寺は社会に開かれる。新しい仏教のあり方を模索する希望の書！」とある。当たり前に使われている「お坊さん」「お寺」「仏教」とは、いったい何か？ということである。

もちろん、当然、本書ではまさにその「お坊さん」「お寺」「仏教」の本質が議論されているわけであるが、論じている側に共通の認識があるかどうか、ということである。

たとえば、「仏教」と政治思想から来る「公共性」とが、必ずしも密接でないような（これまでの）認識が繰り返し

示されているが（たとえば、「はじめに」六頁、第一章八九頁など）、果たしてその場合の「仏教」とは何をさしているのか。

特に、ジレンマ6「信仰をもつていれば、被災しないのか？」に関して、「はい」と答えた人はおらず、ジレンマとして成立しなかつた。このことは複数の人が取り上げているが（たとえば、第二章九六頁、あとがき二四二頁）、ジレンマとして成立しなかつたのはなぜか、ではなぜこのジレンマが設定されたのか、ということになる。別の、宗教と平和に関するシンポジウムでは「はい」と答えた人もいるそうであるから（第〇章三九頁）、「本願寺白熱教室」ではジレンマとして成立しなかつただけで、宗教におけるジレンマとしては成立する、ということになる。ここでは天罰論の否定として論じられており（第二章）、そのことは重要な問題であるが、ここにはまた、宗教とは何か、仏教とは何かという問題が根底にあるはずである。それがまた「公共性」から「宗教性」（この場合、「仏教性」と言うべきか）が排除されるべきかどうか、という議論にもなると思う。

そもそも、小林正弥氏の言うように、「公共的な問題は非宗教的・非精神的な考え方によつて決められるのです」（第八章二一七頁）であるとしても、ここでいう「宗教」とは、氏も指摘するとおり、ユダヤ教やキリスト教を基本とするもので（同二一九頁）、果たして仏教も同様に扱うべきかどうかという問題が残る。小林氏自身、（政治的議論において）「しばしばエゴイスティックな世俗的次元を超えた宗教的ないし精神的な高い観点からはどうに考えられるのか」ということを人々が知ることができれば、議論の質が高まつていくでしよう。（同二三六頁）と述べておられるので、仏教観あるいは宗教観といつても無限定に使われているのである。

このことは一方で、本書に登場する人物が（「本願寺白熱教室」での発言者まで含め）ほとんどが浄土真宗（浄土真宗本願寺派）の関係者であるといつてもかかわつてくる。

当然のことであるが、執筆者は、それぞれ仏教者としての立場から論じているわけであるが、第三章の島薙進氏は、

(監修の小林正弥氏とただ二人) 宗門外の人であり、大谷光真氏の立場を紹介しているものの、あくまで宗教学者としての立場からであるし、第四章の川村覚文氏は、哲学研究者としての論に徹しておられるよう見受けられる。その方々は、多かれ少なかれ「お坊さん」(または、仏教者)としての面が確かにある。このことは、「本願寺白熱教室」の発言者においてはさらにはつきりしている。

宗門内か外か、信仰者か否かを話題とするのは、一つには、(本書の課題でもあると思うが) 内輪の議論に終わつていいのか、という検証が常に必要であるということである。それはまた、第一章の問い合わせであつた、「人々に伝わる言葉で価値を伝えることができているのだろうか」ということでもある。「お坊さんである」というだけの根拠のない自信からは未来への展望は出てこないのである。

なお、評者は、浄土真宗のご法義を充分に理解できている者ではないので、当然、本書の理解もまた門徒の方とは違つていよい。「本願寺」白熱教室だからそれで良いのかもしれないし、ご法義の理解は別にして、仏教の現状への提言は十分に理解したつもりである。

仏教が社会に向きあう最前線の一つであろう仏教教育において、仏教の教育においても、仏教者の教育においても、たくさんの課題を示唆する貴重な本である。

法藏館、二〇一五年六月二〇日発行、四六判、三〇〇頁、一四〇〇円(税別)

(駒澤大学教授)